旺文社文庫

出家とその弟子

(他) 俊　寛

倉田百三著

「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたって、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやしくも知識人たらんとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

赤尾好夫

〔編集顧問〕（五十音順）
亀井勝一郎　茅　誠司　木村　毅
塩田良平　中島健蔵　森戸辰男

旺文社文庫　出家とその弟子　他一編　200円

昭和40年11月20日　初版印刷
昭和40年12月10日　初版発行
著者　倉田百三
発行者　赤尾好夫
印刷所　株式会社　文弘社

発行所　© 株式会社　旺文社
東京都新宿区横寺町
電話　(269)-2111（大代表）

（中村・穴口）　10N72-3-4

旺文社文庫

出家とその弟子

（他）俊　寛

倉田百三著

文部省奨学金留学生
日本語教育委託費に
よる購入図書

旺　文　社

目次

出家とその弟子　五
俊寛　一四七
解説　佐古純一郎　二三一
人と文学　二三一
作品解説　二三七
作品鑑賞　二四三
俊寛について　二四八
上演の思い出　村山知義　二四九
父の思い出　倉田地三　二五三
代表作品解題　二五八
参考文献　二六二
年譜　二六三

本文写真「出家とその弟子」昭和37年佐藤プロ第一回公演
「俊寛」　昭和28年大歌舞伎慈善特別公演

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

原文は新かなづかいに改めたほか、原文の表現をそこなわない範囲で現代表記法にもとづいて漢字を削減した。また、難解な語句や事項には、小活字で傍注を加えた。

（編集部）

出家とその弟子

舞台写真の配役

日野左衛門	倉田　地三
お兼	清洲すみ子
松若（出家して唯円）	沈　美京
親鸞	加藤　嘉
慈円	金井　大
良寛	伊藤　正次
唯円	板東鶴之助
善鸞	林　昭夫
浅香	花柳寿美國
かえで（出家して勝信）	扇　千景

この戯曲を信心深きわが叔母上にささぐ

極重悪人唯称仏。　我亦在彼摂取中。
煩悩障眼雖不見。　大悲無倦常照我。(1)

（正信念仏偈）

(1)読み下しにすると、「極重の悪人ただ仏を称すべし。我また彼の摂取の中に在るなり。煩悩眼を障えて見ずといえども、大悲倦くことなくして、常に我を照らしたまう。」となる。「正信念仏偈」とは親鸞が「教行信証」の「顕浄土真実教行証文類二」の終末に書いたもの。七言百二十句からなる。ここは親鸞が源信の語を引用した部分で、意味は、「どんなにひどい悪人でも阿弥陀仏におすがりしなさい。私（源信）もまた弥陀の慈悲によって救われているのです。人間の悪しき欲望が目をさえぎってそのありがたい光を見ることはできませぬが、しかし、その広大な慈悲の光は常に私を照らしていてくださるのです」となる。

序曲

死ぬるもの

——ある日のまぼろし——

人　間　（地上をあゆみつつ）わしは生まれた。そして太陽の光を浴び、大気を呼吸して生きている。ほんとにわしは生きている。見よ。あのいい色の弓なりの空を。そしてわしのこの素足がしっかりと踏みしめている黒土を。生いしげる草木、飛び回る禽獣、さては女のめでたさ、子供の愛らしさ、あゝわしは生きたい生きたい。（間）わしはきょうまでさまざまの悲しみを知ってきた。しかし悲しめば悲しむだけこの世が好きになる。あゝ不思議な世界よ。わしはお前に執着する。愛すべき娑婆よ、わしは煩悩の林[2]に遊びたい。千年も万年も生きていたい。いつまでも、いつまでも。

顔おおいせる者[3]　（あらわる）お前は何者じゃ。

人　間　私は人間でございます。

顔おおいせる者　では「死ぬるもの」じゃな。

（1）人間の住む世界。もと仏教用語で、梵語 pūrṇa の音訳。（2）人間的な愛欲のうずまく社会。（3）真・善・美を厳しく区別し、追究するつめたい理性を人格化したものと思われる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

人　間　私は生きています。私の知っているのはこれきりです。

顔おおいせる者　お前はまたごまかしたな。

人　間　私の父は死にました。父の父も。お、私の愛する隣人の多くも死にました。しかし私が死ぬるとは思われません。

顔おおいせる者　お前は甘えているな。

人　間　（やや躊躇して後）わたしは恐れてはいます。もしや死ぬのではなかろうかと。……あ、あなたは私の心を見抜きましたな。ほんとうは私も死ぬのだろうと思っているのです。私の祖先の知恵ある長老たちも昔から自分らのことをモータル[1]と呼んでいますから。

顔おおいせる者　それはほんとうじゃ。禽獣草木魚介の族と同じく死ぬるものじゃ。

人　間　あなたはどなたでございますか。その威力ある言葉を出すあなたは？

顔おおいせる者　わしは死なざるもの[2]に仕える臣じゃ。お前はわしを知らぬかの。

人　間　知っているような気もするのですが、……い、え、やはり知りません。

顔おおいせる者　お前はたびたびわしの名を呼ぶようじゃ。ことにこのごろはあまりたびたびなので煩わしいほどじゃ。

人　間　ではもしやあなたは？　おそれながらお顔おおいをとって一度だけどうぞお顔をお見せくださいませ。

顔おおいせる者　わしはモータルには顔を見せぬものじゃ。死ぬるものには。

（1）mortal 死すべき者。人間。　（2）真・善・美を弁別する絶対永遠の理法。真理。

人　間　それはなぜでございます。

顔おおいせる者　モータルを見るとわしは恥ずかしくて死ぬるからじゃ。

人　間　死ぬる者という言葉には軽蔑の意味が含まっているように聞こえます。

顔おおいせる者　死ぬのは罪があるからじゃ。[1]罪のないものはとこしえに生きるのじゃ。「死ぬる者」とは「罪ある者」と同じことじゃ。

人　間　では人間は皆罪人だとおっしゃるのでございますか。

顔おおいせる者　皆悪人じゃ。罪の価は死じゃ。（消ゆ）

人　間　今のはあれだな。それに違いない。いったいあれは幻だろうか実在だろうか。わしは初めはむろん幻だと思っていた。けれどだんだんそうは思われなくなりだした。だってあの恐ろしい破壊力は、あまりはっきりしているもの。実在だとしていったいあれは何者だろう。わしはあれの正体が見たい。それを知りさえしたらこわくはない。わしはあの恐ろしい火と水との正体[2]を知ってからは、彼ら自身の法則でかえって彼らを使役してわしの粉ひき場の車をまわさせたり竈をたかせたりしている[3]、わしは彼の法則を知りたい。彼の本体をつかみたい。でなくてはわしの生活はいつも脅かされるから。あれを知るようになったのはわしの不幸だ。しかしわしの知恵の成長でもある。あゝ恐ろしい彼よ！

（1）絶対永遠の理法に合致しない行為（罪）は、やがて真理の審判を受けて滅び去る（死ぬ）という考えが根底にある。
（2）理性の激しさ、つめたさを火と水にたとえた。（3）人間が理知を働かして自然界の法則を利用し、合理的な物質生活を営んでいることを比喩的に言った。

顔おおいせる者　（あらわる）お前はまたわしを呼んだな。
人　間　私はあなたの顔が見たい。
顔おおいせる者　ゆるされぬ。
人　間　どうあっても。
顔おおいせる者　その欲望はお前の分にすぎている。お前の目に不浄のある限りは。[1]
人　間　弓矢にかけても。
顔おおいせる者　あわれなものよ！
人　間　（手をのばして顔おおいをとろうとする）
顔おおいせる者　その手にわざわいあれ！（遠雷きこゆ）
人　間　（ひざまずく）
幻影の列あらわる。
顔おおいせる者　見よ。
人　間　鳥や獣やはうものの列がすぎる。鷲は鳩を追い、狼は羊をつかみ、蛇は蛙をくわえている。だがあの列の先頭に甲冑をかぶり弓矢を負うて、馬にのって進んでいるのは人間のようだ。
顔おおいせる者　彼は全列を率いている。
人　間　あれは征服者だ。
顔おおいせる者　そして哀れなもののなかの最も哀れなものだ。

（1）人間が迷妄にとらわれているかぎり、理性の本質を見きわめることはできない。

人　間　あ、馬に拍車をあてた、全列は突進しだした。（凶暴なる音楽おこる）　まるであらしのように。あんなに急いでどこに行くのだろう。

顔おおいせる者　滅亡へ。すべてのわしを知らないものの行くところへ。

人　間　お、。

列通過す。あらしのごとき音楽しだいにおだやかになり、静かに夢のごとき調子となる。新しき幻影現わる。

顔おおいせる者　見よ。

人　間　若い男と女だな。男はたくましい腕の中に女を抱いている。そして女は男の胸に顔をうずめている。玉のような肩に黒髪がふるえている。甘いさざめきに酔っているのだろう。

顔おおいせる者　よく見よ。

人　間　（熟視す）あゝ泣いているのだ。男は女をはなしてため息をついている。さびしそうな顔。

顔おおいせる者　幸福の破れるのを知りかけているのだ。

人　間　あなたを呼んでいるのではありませんか。

顔おおいせる者　わしに気がつきかけているのじゃ。しかし、わしを呼ぶのを自らさけているのじゃ。自分をいつわっているのじゃ。

人　間　男はふたたび女を抱こうとしました。けれど女はこのたびは突きのけました。そして男を呪うています。男は女を捕えました。無理に引っぱって崖のそばに行きました。……あゝあぶない。……（叫ぶ）あッ。

顔おおいせる者　わしをまっすぐに見ないものの陥るあやまちじゃ。（音楽やみ、幻影消ゆ）

人　間　私はあなたをみとめています。あなたをまっすぐに見ています。あなたの本体を知りたいと願っています。

顔おおいせる者　小猿の知識でな。ものの周囲をまわるけれど決してものの中核にはいらない知識でな。

人　間　私はあなたの力を認めます。あなたの破壊力を。あなたは何のために、ものをこわすのですか。

顔おおいせる者　それはこわれないたしかなものを鍛え出すためじゃ。

人　間　私はそのたしかなものを求めます。私があなたを知って以来あなたにこわされないものを捜しています。

顔おおいせる者　見つかったかな。

人　間　まだ。たしかなと思ったものはみなあなたがこわしてしまいましたから。征服欲も友情も、恋も学問も。

顔おおいせる者　こわれるものはみなこわすのがわしの役目じゃ。（間）

人　間　たしからしいものを見つけました。今度はだいじょうぶのつもりです。

顔おおいせる者　何ものじゃ。

人　間　子供です。たとえ私は衰えて死滅しても、わたしの子供は新しい力で生きるでしょう。私の欲望を子供の魂のなかに吹きこみます。

顔おおいせる者　お前はまだ知らないな。
人　間　え。
顔おおいせる者　お前のむすこは死んだぞ。
人　間　えっ。（まっさおになる）そんなことがあるものか。
顔おおいせる者　凶報が来るのにまもあるまい。
人　間　達者で勉強しているという手紙が来たのはけさのことです。
顔おおいせる者　昼すぎに死んだのだ。
人　間　うそだ。
顔おおいせる者　（沈黙）
人　間　（熟視す）あゝあなたの態度にはたしかさがある。（絶望的に）だめだ！
顔おおいせる者　さようなら。
人　間　（あわてる）待ってください。せがれは病気をかくしていたのですね。あわれな父に心配させまいと思って。
顔おおいせる者　組でいちばん元気だった。
人　間　決闘しましたか。無礼な侮辱者を倒すために。あれは名誉を重んじたから。
顔おおいせる者　いいや。
人　間　ではどうして？
顔おおいせる者　煙突から落ちたのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton